

宮城県の水田地帯の震災復興 —仙台東部地区の状況と七郷地区の事例—

森 田 明

目 次

1. はじめに
2. 仙台東部地区の概況
3. 七郷地区のイーストカントリー
4. おわりに

1. はじめに

2018年度には、宮城県では、被災農地13710haのうち、13640haが復旧し、99.5%が利用可能とされており、名実ともに震災から復旧したといえる状況にある。そのうち、仙台市内の仙台東部地区では、国直轄災害復旧事業の事業費として、地区面積2,162ha（農地、道路、水路を含む。）、区画整理後の農地面積1,909ha（前1,924ha）、事業費564億円が復興に向けて投じられた。

仙台市の農地の復旧は、東日本大震災復興特別区域法より前に実施が決定されたため、通常の国直轄事業として行われた。そのため復旧には、受益者負担として農家負担分が生じるはずであったが、それは仙台市が負担し、農家負担はゼロとされた。しかし、そのおかげで農地の復旧と区画整理とが同時に進行でき、早期に復興を図ることができ、2018年度は、それぞれの地区の周辺部に残された地域400haで実施される。

2016年の報告でも行った六郷4ブロック（仙台東部地区では、用水によって27のブロックに分けられている。）の井土地区では、それまで1,263筆あった農地が、98筆までに集約され、1筆を1haの大区画にし、その生産性・作業効率の上昇には、各方面から期待が寄せられている。本報告では、その北側に隣接

する、同じ仙台東部地区の七郷地区にあるイーストカントリーについて行うことで復興後の経緯と同地区の現状について報告を行う。

2. 仙台東部地区の概況

2.1 仙台東部地区という地域

仙台東部地区については、概略を2016年の報告[3]にも記載しているが、このことに加えて特徴をいくつかみてみよう。

仙台東部地区では、震災復興のための換地区が3つ設置された。旧村地域に対応して、高砂地区（宮城野区）、七郷地区（若林区）、六郷地区（若林区）である。高砂地区は最も北側に位置し、七北田川河口付近に至る地域である。また、七郷地区は、もっとも仙台駅に近い地域で、住宅地としても利用されていた。3地区のうちもっとも南に位置する六郷地区は、名取川の北辺に位置している地域である。

高野[2]によれば、震災前から、この3地域の平均経営耕地面積は宮城県平均よりも高く、耕作放棄地率は小さいが、これはこの地域が農地として優良であるからだという。たしかに沿岸部のため平野が広がり、経営しやすい土地が広がっており、かつてはそのような農地を守ってきた経緯があるだろう。その一方で、農地面積の著しい減少も指摘がなされている。仙台市という大都市近郊に位置していることに原因しているが、なかでも七郷地区の減少は著しいという。大きな要因としては、都市化の他に、地下鉄東西線の敷設が指摘されている^(注)。

こうした都市近郊地域としての仙台東部地域では、特に高砂地区、七郷地区は、都市化の影響が大きく、そのため効率性の高い水田が主な農業となったが、都市化のプレッシャーが他の地域よりも弱い最も南に位置する六郷地区では都市郊外の農業として園芸農業の割合が高い。そのために、震災前は1筆が10aという小さな区画のまま残存することとなった。震災後の圃場整備では、同地区ではこれを一気に1ha区画にまで拡大している。他の2地域は、1筆が30aのため、その畦畔を取り除いて3筆を1区画とする90a区画の農地に区画整理するとされた。

2.2 農業センサスにみる仙台東部地区の状況

次々と新しくなる被災地の農業生産の取組にあつては、すでに過去の値となるかもしれないが、2015年最新の農業センサスの結果を基に同地域の特徴を見つめてみよう。なお、掲載表には、仙台東部地区の北西部に隣接し、まったく津波被害のなかった岩切地区についても参考値として掲載した。

表1 仙台東部地区の農家人口構成比とその変化（販売農家）

単位：%

		計	19歳以下	20-34	35-49	50-64	65歳以上
2010	高砂	100.0	13.9	15.6	13.2	26.7	30.5
	七郷	100.0	16.5	14.9	14.7	23.7	30.2
	六郷	100.0	14.2	15.7	14.8	25.5	29.8
	岩切（参考）	100.0	16.7	15.0	15.4	22.7	30.2
2015	高砂	100.0	11.2	17.6	12.3	25.8	33.0
	七郷	100.0	12.3	17.2	11.3	26.2	33.1
	六郷	100.0	12.7	14.9	13.8	27.2	31.4
	岩切（参考）	100.0	13.0	15.7	13.3	23.5	34.5
変化 (差分)	高砂		-2.7	2.0	-0.9	-0.9	2.5
	七郷		-4.2	2.2	-3.5	2.6	2.9
	六郷		-1.5	-0.8	-1.0	1.6	1.6
	岩切（参考）		-3.7	0.7	-2.0	0.8	4.3

出所：『農業センサス』各年版

農家人口 年齢別の農家人口構成の変化をみると、震災前とあとでは、高齢化がより鮮明になっている。65歳以上の層は、高砂（2.5%）、七郷（2.9%）と高く、また、岩切も4.3%にも増えている。その一方で、20～34歳層でも増えていることが特徴的であろう。七郷地区はそうした傾向が特に顕著である。すべての年齢階層で農家人口の絶対数が減少していることを踏まえると、これらの地域では、子育て世代層が同地域から離れ、一方、農業を担うコアとなる人々が残っている傾向が予想される。つまり、生産活動が強く農家人口を規定していることがうかがえる。集落との関係がどのようになっていくかが注目される場所である。

経営規模 また、経営規模別の変化をみると、10ha以下の農家が著しく減少している。たとえば、もっとも減少の著しい1.0ha未満層では、参考に示した岩切が28.7%減であるのに対して、高砂53.5%減、七郷88.5%減、六郷55.9%減と5割以上、七郷地区では9割弱の減少を示している。

表2 仙台東部地区の経営耕地面積の変化

単位：経営体数（件）、増加率（％）

		合計	1.0ha 未満	1.0～ 3.0ha	3.0～ 10.0ha	10.0～ 30.0ha	30.0ha 以上
2010	高砂	304	101	153	43	5	2
	七郷	247	52	113	71	8	3
	六郷	392	136	180	69	7	0
	岩切（参考）	200	108	67	22	2	1
2015	高砂	143	47	64	24	5	3
	七郷	97	6	36	45	8	2
	六郷	233	60	108	55	7	3
	岩切（参考）	158	77	59	19	2	1
増減率	高砂	-53.0	-53.5	-58.2	-44.2	0.0	50.0
	七郷	-60.7	-88.5	-68.1	-36.6	0.0	-33.3
	六郷	-40.6	-55.9	-40.0	-20.3	0.0	-
	岩切（参考）	-21.0	-28.7	-11.9	-13.6	0.0	0.0

出所：『農業センサス』各年版

こうした減少の分岐が10ha付近にであり、辞めた農家の農地が10ha以上の層の農家に集まっていると考えられる。この層の農家にどこから、また、どのように集まってきたのかは、この表からは判断できないが、これら上層農家の数に変化がないことから、特に30ha以上の農家に集まっているだろうと予想できる。いわば、仙台東部地域では、小規模農家の大量の脱落によって大規模農家による規模の拡大が起きていると考えてもよいだろう。

表3 借入耕地面積の田畑構成比

単位：％

		合計	田	畑
2015	高砂	100.0	98.9	1.1
	七郷	100.0	99.7	0.3
	六郷	100.0	91.1	8.9
	岩切（参考）	100.0	99.3	0.7
2010	高砂	100.0	99.4	0.6
	七郷	100.0	98.8	1.2
	六郷	100.0	88.8	11.2
	岩切（参考）	100.0	99.4	0.6

出所：『農業センサス』各年版

農地の借入 そこでの農地の借入をみると、借入を行った農家はどの地域でも減少しているが、その借入の9割以上が田である傾向は、震災前と後では、大きな変化はなく、特に七郷地区がその割合が高く2015年で借入農地の99.7%を占めている。一方、その割合がやや低かったのは六郷地区であり、震災前から1割程度は畑として借り入れており、震災後もほとんど変わりはない。しかし、面積としては震災後には、震災前の2倍近い3,465aが畑として借り入れられている。また、震災後、田の借入も伸ばしていることから、貸借がすすんで行われていることが分かる。これは、六郷地区が他の地域に先んじて土地改良を完了して営農を開始していることと関係しているだろう（森田[3]を参照。）。津波被害のなかった岩切でもやや田の借入面積を増やしている。

表4 仙台東部地区の土地利用（作目）

単位：面積 (ha)、増減率 (%)

		経営耕地 総面積	田				畑	
			稲	稲以外	作付け なし	作らな かった		
2015	高砂	49,351	47,320	29,334	15,784	2,202	2,031	369
	七郷	53,379	51,690	37,142	13,751	797	1,685	143
	六郷	85,792	73,051	48,502	23,298	1,251	12,741	2,925
	岩切（参考）	34,836	32,496	18,858	12,753	885	2,337	203
2010	高砂	86,600	82,423	43,788	35,416	3,219	4,177	488
	七郷	81,854	78,067	48,724	16,355	12,988	3,787	489
	六郷	83,366	69,163	50,161	1,124	17,878	14,198	2,027
	岩切（参考）	36,695	33,595	19,306	13,212	1,077	3,050	269
増減率	高砂	-43.0	-42.6	-33.0	-55.4	-31.6	-51.4	-24.4
	七郷	-34.8	-33.8	-23.8	-15.9	-93.9	-55.5	-70.8
	六郷	2.9	5.6	-3.3	1972.8	-93.0	-10.3	44.3
	岩切（参考）	-5.1	-3.3	-2.3	-3.5	-17.8	-23.4	-24.5

出所：『農業センサス』各年版

作目 実際の作目をみたとき、稲を作った面積は、高砂や七郷は2010年の2～3割の大きな減少しているのに対して六郷地区は岩切と同じく、ほぼ同程度の作付けとなっている。むしろ、稲以外の作物だけを作った田の面積が著しく増えている。また、仙台東部の3地域全体に言えることだが、何も作らなかつた田の面積が、2010年と比較すると9割以上も大きく減少している。圃場整備が

行われ意欲有る生産者の経営に組み込まれたことが大きな理由と考えられ、余すことなく、耕地を利用している様子が見えてくる。

畑地の面積は、全体として2010年に比べるとやや減少しているが、六郷地域がやや畑地面積が大きいという特徴がある。1位作物をみると（表は不掲載）、六郷地区だけが稲作を1位作物とする経営体数が低い。一方、高砂と七郷は、もともと9割程度と高い割合が稲作にあったが、2010年と2015年を比べてみると、それがやや減少している。六郷地域は、震災前も6割程度と他の地域よりも低かったものが更に5%程度減少している。六郷地域は、露地野菜が盛んで、震災後はそれがやや増加するとともに、施設野菜が増えている。露地野菜や施設野菜の生産へのシフトは、宮城県の復興の方針であるが、もともとそうした生産が多かった六郷地域では、規模拡大の傾向とともにそうした方向への転換も意識して行われたものと考えられる。

表5 耕作放棄地面積の変化

単位：面積（ha）、増減率（%）、経営体当たり面積（a）

		総面積	田	畑	経営体当たりの耕作放棄地面積		
					総面積	田	畑
2015	高砂	853	647	206	42.7	80.9	13.7
	七郷	134	63	71	19.1	31.5	14.2
	六郷	541	114	427	23.5	16.3	26.7
	岩切(参考)	209	58	151	10.0	6.4	11.6
2010	高砂	518	172	346	20.7	15.6	23.1
	七郷	356	63	293	17.8	21.0	17.2
	六郷	874	235	639	19.4	10.2	22.0
	岩切(参考)	235	138	97	11.8	12.5	10.8
増減率	高砂	64.7	276.2	-40.5	105.8	417.2	-40.5
	七郷	-62.4	0.0	-75.8	7.5	50.0	-17.6
	六郷	-38.1	-51.5	-33.2	21.1	59.4	21.1
	岩切(参考)	-11.1	-58.0	55.7	-15.3	-48.6	7.8

出所：『農業センサス』各年版

耕作放棄 今回のこのような復旧事業による大きな効果の1つとして、耕作放棄地の減少を指摘することができるだろう。なにもなければ農業者の高齢化などによって放棄されていた農地が、一塊の区画として再生され、利用権の調整が行われ、再び農地として耕作されるようになった。高砂地区だけは耕作放棄

地面積が増えているが、七郷地区、六郷地区は大きく減少している。しかし、宮城県全体としてはいぜん増加（9.7%増）の傾向にある。

一方、耕作放棄地を出している経営体当たりの耕作放棄地面積は、増加している。これは津波被害の影響だと考えられる。こうしたことを考え合わせると、この復興が、効率的な農地の利用という側面をサポートしていることの一つの例といえるだろう。

表6 1 経営体当たりの所有台数

単位：台数（台）、増減率（%）

		動力田植機	トラクター	コンバイン
2015	高砂	1.04	1.19	1.05
	七郷	1.07	1.39	1.02
	六郷	1.10	1.43	1.16
	岩切（参考）	1.01	1.14	1.04
2010	高砂	1.03	1.11	1.03
	七郷	1.02	1.23	1.02
	六郷	1.01	1.19	1.01
	岩切（参考）	1.00	1.10	1.02
増減率	高砂	1.29	7.44	2.38
	七郷	4.58	13.06	-0.34
	六郷	8.43	20.45	14.94
	岩切（参考）	0.96	3.98	1.50

出所：『農業センサス』各年版

農業用機械 最後に、津波被災地域にとって大きな影響を与えた農業機械についてみてみよう。

津波によって沿岸地域にあった農業機械のほとんどは使えなくなり、耐用年数を過ぎてもなお利用されてきたそれらの農業用機械は、高齢農家などの営農継続を支えてきた。しかしながら、今回の被災によって機械を新たに更新するしかなくなったことから、こうした農家のリタイアを促進したといわれる。残念ながら、2015年の農業センサスは、2011年から4年後の状況なのでこうした様子を必ずしも示していない。震災後の2015年でも、農家には動力田植機、トラクター、コンバインが備わっているばかりか、2010年と比べても増加している。特に、六郷地区の農業機械の装備が進んでいる様子が分かる。1経営体当

たりの所有台数をみたとき、六郷地区は、トラクターで8.4%増、トラクターで20.4%増、コンバインで14.9%の増となっている。七郷や高砂も、岩切と比べれば、こうした農業機械の所有が増加していることが確認できる。もっとも、所有している農業用機械の台数は、農家数が減少していることから、その数も減少しているため、その分、経営体の所有する農業用機械の装備率は高まっているといえる。このことも経営規模の拡大と大きく関係するものである。

3 七郷地区のイーストカントリー

七郷地区で、東日本大震災の津波の防波堤となった仙台東部道路そばの海岸側に農事組合法人イーストカントリーはある。2018年度現在の経営は、全部で72ha行っており、うち圃場整備で10ha、転作大豆が10ha、残りが水稲である。水稲のうち、8.5haに飼料用米が作付けられている。

圃場は、震災の津波被害にあっているが、現在は圃場整備がほとんど終了しており、残り10haが今年度（2018）に行われているが、それも来年度には完了するという。先に述べたように仙台東部地域では圃場整備が行われ、今は換地の最中であるが、とりあえず仮に割り付けられた農地での耕作が行われている。

圃場区画としては、同地域は0.9ha区画を基本として整備され、それまでの区画（0, 3ha）から効率化が図られている。

イーストカントリーは、当初、大豆・小麦等への転作組合として発足していたが、2007年、水田経営所得安定対策に対応するため集落毎に分離してしまい、神屋敷の集落組織として、また、単に転作の計画に止まらず米の生産活動までを射程とする組合として再編成する必要を感じたことから、神屋敷集落組合が結成され、翌年には、法人化して利用権設定を行い経営面積38haの農事組合法人イーストカントリーが誕生した。当時、仙台市では規模拡大を支援しており、小作料の半減（当時10a当たり15千円だった小作料を、その半額7500円を仙台市が負担するもの。）が行われていたので、受け手にとっても農地を集めやすい環境もあったという。

イーストカントリーでは、作付ける場所が農家毎に割り当てられている。その中心にいるA氏は、後継者と2人で40haに作付けを行っているが、15haが割

り当てられているBさんもあり、この2つの農家でほとんどの経営面積を占めている。耕作は、それぞれがそれぞれで行うことになっているが、肥料等はイーストカントリーとして購入し、また収穫物をイーストカントリーとして販売する。高齢化等いろいろな事情でA氏に依頼されてきた。

イーストカントリーの理事は13名で現在は常用雇用はおらず、稲作単一の経営である。2015年ごろに、2名ほど若者を雇用したことがあるが（「農の雇用事業」で）、1名は現在理事になって出資を行っており、もう1名は野菜作りに興味を持って、現在は他県で就農しているという。

作付け品種としては、五百川、まなむすめ、ひとめぼれ、つや姫、ミルキークイーン、ささにしき、みやこがね、こもちまる、と多様である。五百川は、木徳神糧が種苗の供給権を有し、近年宮城県で生産の拡大している早生品種である。このように多品種であるのは、収穫期をずらすこと、リスクを分散させるためであるという。およそ2カ月という期間をかけ、これらを収穫する。

湛水直播では、15haほど行っており、ひとめぼれ、まなむすめ、ささにしき、みやこがね、こもちまるを収穫している（残りは移植）。また、飼料用米については、全量が直播である。直播では、鉄コーティングを施して、鳥に食べられないようにするが、一方芽揃いについてはいつも不安を感じるという。催芽したものを播種するカルパー直播を他の圃場で試みたところ、たしかに芽揃いがよく、肥料は少なく済むものの、鳥に食べられるものも多く、現在Aさんが採用している多品種少量生産には向かないので採用しなかったという。また、乾田直播は、作付け技術が異なり対応した機械の導入が必要となることから、今は採用できないという。

イーストカントリーでは、ミニライスセンターを所有し乾燥調製も法人内で行っている。自社で取れた米をここで精米し出荷し販売している。多様な米を収穫しているが、大型のライスセンターのようにすべて一緒になってしまうことはなく、それぞれで精米し販売できるのでよいという。

自家精米された米の一部は、2012年度には仙台市の「農と食のフロンティア推進特区」第1号に認定を受けた同法人が六次産業化として経営しているレストランで提供されている。こうしたこまやかな対応ができるのは、過度に大規模に行っていないからだといえる。レストランも家族で経営しており、最も忙

しい時には朝の2～3時ごろから準備をおこなっており、これでは多忙すぎるという。また、転作大豆についても、自家工場味噌を生産しており、単に転作大豆を作るだけではない高付加価値化に努めている。

一方、震災後、7年が経過し、当時導入した機械の更新時期が来ている。経営規模からその使用がフルであるため、更新は必須であると考えている。震災後の津波によって、当時所有していた機械は全て使えなくなり、営農を継続するには新たに導入する必要に迫られていた。そこで、2011年度にミニライスセンターと農業用機械を新たに購入したが、これらは、他の沿岸部の法人のようにリース事業（C-4事業）によって導入されたものではなく、自己負担分があった。というのは、まだ震災復興の補助金スキームができる以前に導入が図られたものだからである。その後に営農再開のため震災当初に機械の導入について、当局にいろいろと意見を求められ、リース事業（C-4事業）の仕組みが作られたため、イーストカントリーは利用できなかった。結局、国の補助率50%で導入することになり、そのほか仙台市や他のファンドから入れて、なんとか自己負担分17.5%（+消費税）で機械を購入した。

今年は、コンバインが1基を5年返済の近代化資金で導入したところであるが、このほかにもそろそろ機械・設備の更新時期なので今後経営への負担が大きくなることが予想される。

3.3 小括

イーストカントリーは、震災後に辞めていく農家の農地を引き受けて規模を大きくしたところもあるが、急速な拡大ということはない。というのも、今の経営のやり方では、この程度が限度であると認識しており、急速な規模拡大は難しいと感じている。

その理由は、家族で行う経営としての限度である。稲作経営については、40haを親子2名で行っており、省力化の技術としての直播などを取り入れつつ、収穫期を広げ、かつ品種によるリスクの回避を図るなど今の経営資源として取り得ることを行っている。この上で、野菜を導入するには、雇用を行う必要が出てくる。そのほかに、妻がレストランを営んでおり、圃場で取れた米や、併設された味噌工場からの味噌が利用されており、昔ながらの言葉では「家族

労働の完全燃焼」のような状況にあるといえるだろう。いまのところ、イーストカントリーとしては、家族経営以外の経営を指向してはいないものの、周囲の政策は規模拡大を指向しており、また、そうしたことを条件とする借入資金も多いことから、今後の展開が注目される。

4 まとめ

本報告では、仙台東部地区の震災後の農家の状況について、農業センサスによってみてきた。そこでは、圃場整備によって耕作放棄地が解消され、機械が装備され、限定された農家による効率的な経営の可能性が示されている。農業センサス後、既に3年が経過した同地域にあっては、こうした動きは加速されてきているものに思われる（既に仙台市では、集約する政策が進められている。）。今回は仙台市の中心地に近い七郷地区の沿岸部でない農事組合法人に注目して報告を行った。しかしながら、仙台東部地区のこのほかの経営体の動きにも注目しなければならない。とりわけ、震災後に導入した機械や施設の更新が今後ピークを迎えることから、それらの経営体の対応が注目される。

注

地下鉄東西線は、2000年にルートが示され、2007年には工事が開始されたが、東日本大震災も多少は中断があったものの、工事は継続されて2015年に完成している。

参考文献

- [1] 熊田絵里・竹ヶ原秀俊・宇山藍里「被災地における集落営農の役割ーイーストアグリア六郷（仙台市若林区）を事例にー」『地域構想学研究教育報告』No. 5、2014.
- [2] 高野岳彦・前川貴史「仙台平野の農業復興と組織経営体の動向」『地域構想学研究教育報告』No. 6、2015.
- [3] 森田明「東日本大震災後の被災地での新たな農業活動」『農業研究』第29号、2016.

